

ISSN 2759-6877 (ONLINE)
ISSN 1342-1905 (PRINT)

JAALD

Bulletin of Japan Association of
Agricultural Librarians and Information Specialists

日本農学図書館協議会誌

No. 218 2025年6月

BioOne Digital Library は、生物学、生態学、環境科学に関する200以上の雑誌と360以上の電子書籍を提供するプラットフォームです。BioOne Digital Libraryでは下記の製品が提供されています。

- BioOne Complete（電子ジャーナル・コレクション。年間購読）
- BioOne Complete Archive（電子ジャーナルのアーカイブ・コレクション。買い切り）
- ESA eBook Collection（電子書籍コレクション。買い切り）
- CSIRO Publishing BioSelect Collection（電子書籍コレクション。買い切り）

BioOne Complete

生物学、生態学、環境科学を中心に、150以上の出版社から200誌以上の電子ジャーナルを収録するコレクションです。

獣医学、植物科学、鳥類学、昆虫学など、幅広い分野の高品質なジャーナルへのアクセスを使いやすいプラットフォームでリーズナブルに提供します。

<https://bioone.org/browse/title>

ESA eBook Collection



アメリカ昆虫学会（Entomological Society of America）の書籍160冊以上を収録するコレクションです。

これらの書籍は2023年に初めて電子化され、BioOneでのみ提供されています。昆虫学者、動物学者、その他関連分野の研究者の教育的・専門的ニーズに対応するために作成されました。

<https://bioone.org/esa-ebooks>



CSIRO Publishing BioSelect Collection



CSIRO Publishing（オーストラリア連邦科学産業研究機構の出版部門）の書籍200冊以上を収録するコレクションです。

当コレクション(CSIRO Publishing BioSelect Collection)は、生物学の幅広い分野において、数十年にわたる信頼できる知見を提供します。

オーストラリアのユニークな種だけではなく、世界的な応用を伴う主要な研究成果も含まれます。

<https://bioone.org/csiro-ebooks>



BioOne 紹介ページ（日本語）：お問い合わせフォームもあります ➡

無料トライアル申込やお見積依頼、ご質問など、お気軽にお問い合わせください。



【日本総代理店】



お問い合わせ先：ユサコ株式会社 プロダクト部 BioOne担当

〒106-0044 東京都港区東麻布 2-17-12

Email: product@usaco.co.jp

特定非営利活動法人（NPO法人） 日本農学図書館協議会

ともに学び、変わる。未来へ続く図書館へ

日本農学図書館協議会 会員募集中

いま 世界的に 図書館運営が 大きく変わろうとしています
大学図書館 公共図書館 研究機関図書館 企業図書館 それぞれ
独自の取り組みが求められており 新しい運営が模索され 生まれています
当協議会は 農学図書館に限らず 各種図書館の先端的な取組みに関して
現場の図書館員に向けて 新鮮な情報を 会誌を通じてお届けしています
また 図書館運営・情報管理等に関するセミナーや見学会なども 開催しています
これからの時代を担う図書館員・図書館運営に関心のある皆様と
ご一緒に 次世代の図書館を創っていきたいと考えます
皆様の ご参加をお待ちしています

個人会員 5,000 円（年間）

団体A会員 10,000 円（年間）（大学・公共図書館、研究所など各種機関）

団体B会員 30,000 円（年間）（民間企業）

*会員には会誌（年4回刊行）をお届けします
セミナー・見学会：会員特典あり

【入会方法】

入会申込書に必要事項をご記入の上、事務局宛にFAX、メールでお申込みください。

入会申込書(個人会員、団体会員別)はこちら↓からダウンロードできます。

http://jaald.life.coocan.jp/info_20230307/

特定非営利活動法人（NPO法人）
日本農学図書館協議会 事務局
東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学 教職・学術情報課程内
Tel, Fax: 03-3408-5077
E-mail: jaald@nifty.com

日本農学図書館協議会誌 218号 (2025年6月)

目 次

米国図書館における近代日本農学教育史研究資料の探索 熊澤 恵里子	1
Google Apps Script(GAS)を利用した農学生命科学図書館施設予約の自動化 安達 修介	9
学生アルバイトとの協働による蔵書点検や資料の移設作業について 林 成吾	13
【第131回農学図書館情報セミナー報告】 「大学図書館をめぐる最新動向を探る ～オープンアクセス加速化事業について」 海野 かおり	16
オーストラリアのクイーンズランド大学農学部図書館を訪問して 長塚 隆	19
事務局報告	25

Bulletin of the Japan Association of Agricultural Librarians and Information Specialists

No.218

June, 2025

ISSN 2759-6877 (ONLINE)

ISSN 1342-1905 (P R I N T)

CONTENTS

Searching for Research Materials on the History of Modern Japanese Agricultural Education
in US Libraries

Eriko KUMAZAWA 1

Automating the facility reservation at University Library for Agricultural and Life Sciences
using Google Apps Script (GAS)

Shusuke ADACHI 9

Book inventory checks and material relocation work in collaboration with student part-
timers.

Seigo HAYASHI 13

【A Report on the Agricultural Libraries and Information Seminar:The 131th part of the series】
Study on the Latest Trend of University Libraries -About the Open Access Acceleration
Project

Kaori UNNO 16

A visit to JK Murray Library at the University of Queensland Gatton campus in Australia

Takashi NAGATSUKA 19

Note from JAALD 25

米国図書館における近代日本農学教育史研究資料の探索

Searching for Research Materials on the History of Modern Japanese Agricultural Education in US Libraries

熊澤 恵里子

1. はじめに

近代日本の農学教育は札幌農学校と駒場農学校で始まり、前者は米国マサチューセッツ農科大学(Massachusetts Agricultural College, 以下MAC)、後者は英国、独国の農学校をモデルとして組織化されたことで知られている。両校は農学校としては共通性をもちつつも、「制度としては駒場農学校が岩倉使節団と比較的ストレートに結びついたのに対し、札幌農学校は開拓使＝北海道というワン・クッションをおいたところに設置され、理念としては岩倉使節団が洞察し、自省した米欧文化を、クラーク以下の異色なお雇い外国人を通して、『全人格的な教育』の理念を基調とした場で、積極的に受容した¹⁾とされる。特に敬虔なキリスト教徒であったクラークの個性は「札幌農学校における教育を通して、米欧的な合理的な思考と体系的な論理を体得せしめようとした²⁾」という。札幌農学校の設立が開拓政策の一環であったことは周知であり、MAC学長クラークを教頭に迎え農工教育が開始された点は『北大百年史³⁾』に記録されている。しかし、札幌農学校の教育実態や学問系統については未解明の部分が残る。『北大百年史』、三好信好『増補日本農業教育成立史の研究⁴⁾』では北海道開拓のための人材養成という札幌農学校の設立意義やその後の管轄部署の変遷などを詳細に論じているが、農学教育の実態や後の農科大学への系譜は十分に明らかにされていない。「なぜクラークなのか」「なぜ

マサチューセッツ農科大学なのか」といった問いも依然として未解明である。

筆者は2015年度から2017年度に「日欧米史料による帝国大学農科大学の総合的研究」、2020年度から2024年度に「欧米農学導入期における札幌農学校および駒場農学校の総合的研究」と題する調査を実施した。また、2017年・2018年夏および2024年・2025年春には国外調査を行い、札幌農学校に関する史料を収集した。本稿では、マサチューセッツ州立大学アマースト校図書館、米国国立農学図書館、米国議会図書館、スミソニアン図書館・文書館を中心に「近代日本農学教育史研究資料の探索」過程を紹介し、新たな知見構築のプロセスを明らかにすることを目的とする。

2. マサチューセッツ州立大学アマースト校図書館ロバートS.コックス特別コレクション及び大学史料研究センター *Robert S. Cox Special Collections and University Archives Research Center, University of Massachusetts Amherst Libraries(SCUA)*

1)調査方法：SCUA検索

クラークをはじめとする札幌農学校関係者の史料は大学文書館に所蔵されており、データベース検索はSCUAのサイトで行う。本センターは社会変革の歴史やニューイングランド地方の文化研究を主軸とし、約4万冊の貴重書、

数十万枚の写真、マイクロフィルムを所蔵している。これには重要な写本やアマースト校公式記録、フランス革命、原生生物学の歴史、米国人による日本研究が含まれる。閲覧には、事前連絡と現住所の記載がある身分証明書の提示が必要である。

2) アマースト校 SCUA へのアクセスと宿泊

アマースト校はコロナ前から総合大学としての改革を進めており、農科大学の面影は現在ほとんどない。現在、州内出身の学生が7割を占める。近年、大学施設や周辺道路等の整備が進み、キャンパス全体が洗練された印象を与えている。ボストンからのアクセスはサウスステーションからピーターパン・バス *Peter Pan Bus* で、スプリングフィールドを經由し約4時間かかる。チケットは日本から事前に予約できる。終点のアマースト校 *UMass Amherst* で下車する。バス停はキャンパス入口に位置している。センターへのアクセスがわからない時は、まずは見渡して一番高い建物、W・E・Bデュボイス図書館 *W.E.B. Du Bois Library* (写真1) を目指せばよい。特別コレクションは同図書館の25階にある。

宿泊先はキャンパス内にあるホテル・ユーマス (*Hotel UMass, Amherst*) と筆者は決めている。アマースト市街に出るには車が必要であり、

ホテルやB&Bも多くはない。同施設の1階には学生向けのカフェテリアや大学の売店があり、利便性が高い。ホテルからの眺めは良いものの、宿泊料が高い点が最大の課題である。ただ、安全面や部屋の広さ、移動の手間がない点は研究者にとって非常に魅力的である。

3) 札幌農学校とアマースト校

歴史調査の醍醐味は文章史料だけでなくモノ史料の収集にもあり、地政学的視点でのキャンパス巡りも重要である。2024年秋の調査で目にした「札幌農学校」の看板(写真2)には、榆の木 *Japanese Elm Ulmus japonica* の説明文には「William Smith Clark, who served as president of the Massachusetts Agricultural College, was renowned for his development of international education. In 1876, Clark was invited by the U.S. Commissioner of Agriculture to assist in founding an agricultural college in the Japanese city of Sapporo. After years of teaching at Sapporo Agricultural College, Clark's colleagues returned to American soil with the seed of this Japanese Elm. It was planted by Class of 1890 and became the first of its species in North America. The tree represents a historical UMass tradition of cultural and



写真1 W・E・Bデュボイス図書館



写真2 ジャパニーズ・エルム

environmental preservation. Because of its impressive size, the specimen is ranked as the National Champion Japanese Elm and continues to be one of the highest-valued collections of the Frank A. Waugh Arboretum」とあり、クラークの業績や同僚が持ち帰った榆の種が1890年卒業生により植樹され、全米チャンピオンに選ばれるまで成長したことが記されている。この榆はユーマスの文化・環境保護の象徴とされ、日米の教育・文化交流を物語る象徴的な存在である。榆の木と札幌農学校の物語は、キャンパスにおける農科大学時代の面影が薄れる中、日米の歴史的遺産として注目される。ただし、アマースト校で札幌農学校に関する授業やレクチャーはほとんど行われていないのが現状のようである。

4) 史料の縦断的・横断的探索方法

札幌農学校教頭を務めたクラーク (William Smith Clark) の関係文書はボックスのラベルに「クラーク先生」と日本語で表記され、整理・解読が進んだ史料群であるといえる。これらの文書は手書きのものが多く、膨大な量を伴うため、見落としを防ぎ、集中力を保ちながら丁寧に作業を進めることが肝要である。さらに、クラーク文書を裏付けるための史料の縦断的・横断的な探索を続ける必要がある。

①縦断的探索 クラークの指向と行動に着目し、クラーク文書と他文書を精査する縦断的探索では、より高度な分析と解読を行った。SCUAの解説によると、クラークは1848年にアマースト・カレッジを卒業し、その後神学校で自然科学を教え、1852年から1867年まで化学・植物学・動物学の教授を務めた。彼はモリル法(後述)施行による新しい農業カレッジを支援し、1867年に学長となり資金増額や奨学金制度を推進したが、1870年代には入学者数減少で大学の負債問題に直面する。1876年に来日し札幌農学校教頭としてインパクトを残した。しかし帰国後の1879年、MAC学長を辞任することになる。

クラークはモリル法による農科大学創設過程において、「科学的農業」を推進するフレンチ

(Henry Flagg French、初代学長)と教学方針を巡り対立した。フレンチは実用的な農業教育を掲げ、保守的な大学理事会と衝突した人物であり、対立の詳細は立川明の研究⁵で明らかにされている。クラークの教学方針がフレンチの実用主義と異なり、キリスト教倫理や教養重視に基づく点が背景にあったという。立川は、「フレンチは教室、実験室、図書館、体育館からなる極めて実践的且つ近代的なプランを提示し」理事会主流派の反対にあったとし、MAC理事会が指示した第2代学長チャドブーン、第3代学長クラークの路線、すなわち、MACを開学に導いた「基本的教学方針」は「フレンチの唱えたような実用的・職業的な農業教育ではなかった」、「一言でいえば、それは州の若者を、エデンの園に最も近い環境の中に置き、神の御業を忘れない、教養ある人物に育てる、ということであった」と指摘している。これは、我々がイメージする科学技術を駆使した近代農学教育とは大きく異なっている。

クラークの教学方針に変化が見られたのは札幌農学校においてである。1876年のゲスマン(Charles Goessman)宛書簡⁶には、クラークが化学実験室の設計や植物園の建設進行を述べる一方、札幌農学校での経験から理論と実践の重要性を認識していた点が読み取れる。「もしブルックスがいまだに君と一緒にいるならば、彼に農学の理論と実践を勉強して、教授職にふさわしくなるように伝えてくれ。いまはまだこの(職)を彼に約束できないが、来年夏には教授1名の募集があるだろう」と述べ、クラークは自身の後任として考えていたMAC卒業生ブルックス(William Penn Brooks)を同大化学教授ゲスマンの下で業績を積むよう依頼したのである。本書簡には、東京大学や駒場農学校に言及し、大学への接続や昇格を意識した動きも読み取れる。クラークの教学方針は「変化」か「カモフラージュ」か。前者は札幌農学校において理論と実践の必要性を痛感したからであり、目覚ましい発達を遂げた科学技術の取り入れに出遅れたMACの農学教育への少なからぬ反省があったかもしれない。後者はキリスト教倫理中心の授業への批判をかわすねらいからである。クラークの教学方針の「変化」か「変容」かに

については、さらなる縦断的探索が必要となる。

②横断的探索 横断的探索は、国や地域を越えた人や情報の移動・連関、ネットワークに着目した手法である。札幌農学校のカリキュラムがMACをモデルとした理由を探るには、他の有力な農学部が選ばれなかった背景や、日本人留学生の存在がMACに与えた影響を解明する必要がある。

1871年のクラーク宛ブルックス書簡⁷では、日本政府が数千人の学生を教育している状況や、派遣された農学生岩山宗八郎の活動が記されている。ブルックス (Charles Wolcott Brooks) は在サンフランシスコのカリフォルニア州日本領事である。岩山は民部省出仕、鹿児島藩出身の岩山壮八郎(後に敬義)で、海外視察後に牧羊場、下総種畜場等を担当し1883年には農務局長、農商務大書記官を経て、1885年には駒場農学校を兼務した。「日本人は勇敢で、進取の気性に富み、進歩的な国民である。もしあなたが岩山を迎え入れ、彼自身の研究を選択する特権を与えれば、将来、それが思いがけない結果につながると私は信じている」とブルックスは日本人留学生の受け入れをクラークへ勧めている。しかし結果として岩山が短期間の視察後に帰国し英国での研究に備えたため、3年間の留学は実現しなかった。このクラーク宛書簡と同じ内容のブルックス書簡は同時期、日本政府へも送られている。1871年9月3日付大蔵省宛外務省文書別紙に「ブルックス書状書抜」とあり⁸、「岩山宗八郎当地ニ而牧牛之儀修業中ニ有之同人義農物会悉ク一見イタシ候カルフルニヤニテ研究之後マスサコセットニ罷越ボストン近傍之アムヘルストノ農学校ニ入門之儀勸メ置申候但シ右学校ハ亜米利加最大一之モノニ有之候三隅市之助江当地ニテ本草学科修業中ニ有之同人義ハ秀逸之幼年ニ而頻ニ勉強イタシ候乍去同人虚弱之様ニ見請候間オークランドニ渡海居留可致様拙者ヨリ勸メ申候彼地ハ風穏ニシテ肺臓虚弱之者ニハ相応可致ト存候」と事実が確認できる。ブルックスがMACを勧めた理由は、MACが米国で「最大一之モノ」、つまり米国で一番大規模な農科カレッジの一つであることにあった。また、MACが日本政府から選

ばれた背景には、岩倉使節団の一員が同校を訪問し、農業教育と軍事訓練の統合に強い関心を示したことが挙げられる⁹。MACの学生が実験室で学びながら野外作業を行い、訓練を受ける様子を見て、使節団は「これこそ日本のための施設だ。国民に自給自足と自衛両方を教えてくれる」と叫んだという。このように史料を横断的に探索することで、MACが選ばれた理由や、その後の日本の農業教育へのインパクトを明らかにすることができる。

5) 進化する歴史

1858年バーモント州選出の下院議員モリルが農業と機械工業の発展を目的とするカレッジを連邦各州に設立する法案を議会に提出した。上院議員となったモリルは1862年に法案を提出し、「古典的・科学的学問を排除することなく、軍事戦術も含め、農業や機械工学に関連する学問分野を教授する」こと、それが各階層や職業の教養教育の促進のためであることとする農科カレッジ設置が法制化された。札幌農学校化学教師ストックブリッジ(Horace Stockbridge)は後に土地付与大学の実態を調査し、マサチューセッツ、ミシガン、アイオワの3大学が設立要件を遵守してきた点で卓越している(preeminent for the good)と賛辞を与えている。農科カレッジの教育課程では農業の理論と実践が教授されるだけでなく、すべての科学、すべての芸術、すべての分科が「農業の技術」と直接関係して教えられなければならない。農科カレッジの目標は農民を作ることではなく、有用な市民を育成し、その影響力をすべて使ってこれらの人々が農業に従事するよう促すことである。ストックブリッジは、神学の学長と農学(部)の医学教授が農業で成功する若者を育てることは不可能であると説いた。モリル法施行後の進展を検証したストックブリッジの懸賞論文¹⁰は、教育課程における学理と実践の両立、教授陣の課題等を示している。キリスト教倫理による農業技術者の養成は、学理と実践を確実に実現するためにはその在り方において変化、変容せざるを得なかったと推測できる。これこそが近代農学の進化する歴史そのものなのである。

2. 米国立農学図書館

National Agricultural Library (NAL)

1) 資料検索データベースへのアクセス

国立農学図書館(写真3)は米国の5つの国立図書館の1つで、農業及び関係科学分野に特化した世界最大級のコレクションを所蔵している。図書館は農務省 *U.S. Department of Agriculture* に属し、USDA 検索サイトにアクセスする。デジタルアーカイブ化も進んでいる。筆者は近代日本関係書籍、なかでも札幌農学校関係の書籍等閲覧を目的として、現地まで足を運んだ。ワシントンDCの中心部からのアクセスは車利用が合理的である。天高くそびえ立つ図書館は遠方からも容易に見つけることができ、建物にはアブラハム・リンカーンの名称が付され、存在感が際立っている。



写真3 国立農学図書館全体

2) 特別コレクション *Special Collection* の閲覧

事前予約をした日本関係図書及び札幌農学校関連図書のうち、後者は自身が札幌農学校出身である逢坂信吾、谷邨一佐のケプロンの功績を記した自著献本及びケプロンの回想録¹¹が目を引いた。

逢坂著『ホーレス・ケプロンを語る *Memoir of Horace Capron*¹²』の見返しには、「Contributed to The U. S. Dept. of Agri. Library. Author, Shingo Osaka 著者, 逢坂信吾 Sapporo,

Hokkaido, Japan. March 6, 1959」と、逢坂自筆が残されている。逢坂信吾は履歴によると、新潟県出身、1902年札幌農学校予修科卒、1908年東北大学農科大学農学科(農政学・農業経済学)卒。1919年に米国へ渡り神学を学び、1921年に牧師となる。郷里新潟県で伝道活動。1939年に札幌独立基督教会牧師となり、1946年に辞任し、以後著述活動に専念した。1981年に98歳で死去。父逢坂清治は新潟県中蒲原郡の大地主。中学時代に内村鑑三に感化され札幌農学校へ入学。有島武郎は札幌農学校先輩で、共に社会主義研究会を結成している。逢坂はむろん敬虔な基督教者であり、熱烈な札幌農学校信奉者である。

谷邨著『奎普龍將軍¹³』は和綴。見返しに”Book on President Grant and General Capron by Issa Tanimura “という活字のメモが添付され、中表紙見返しに筆で「愛んて 霞蘭土大統領乃靈に捧く 谷邨一佐」と記されている。谷邨は萩・毛利藩の出身で、1869年に上京し父は宮内省出仕。東京府第二中学、バラ学校、耕教学舎、同人社で学んだ後に1886年に渡米。1888年にエール大学に入学し法律・経済を学ぶが、生物学に転向。1891年帰国。その後羊研究に没頭し、1917年に那須高原に草羊園を開設した。1919年に宮内省嘱託として多量の牛馬羊を輸入し、モルガン種の馬を献納したケプロンの名前を記憶するものがないのに驚き、伝記を著そうと決意したという¹⁴。谷邨は「世人動もすればクラークなる者を擁し、北海道開拓の恩人か又は農学教育の元祖でもあるかの如く宣伝しているが、此人は黒田長官から帰国する將軍に依頼し、將軍は我駐米公使と諮り、当時マサチューセツ州立農科大学に教鞭を執り恰かも賜暇年期に当たっていたクラークに、従来東京に設けた開拓使仮学校を北海道に移し札幌農学校と変名したので、八ヶ月計り教頭として来て貰ったのみで、開拓使事業には毫も與っていない(中略)筆者は爰に断然世の妄語を戒めたい」と記している。また、谷邨は創立25年誌に掲載された1887年3月の「従来農学科に於て修得せしめし学科には、英文学・弁舌法・心理学等の如き形而上のもの少からざりしが、この時に至り、漸次純農学に進むの地を為せり」という一文を取り上げ、「則

ちこれがクラーク式農業教育の転換なのであろう」と指摘している。谷邨の言葉が何を意味するかは検討の余地がある。他史料との比較検討を行い、多角的な視点からの検証が必要である。本書の英訳本も谷邨の手で行われ、献本されている。

なお、国立農学図書館の一般図書に森有礼の英文本“*Life and Resources in America*¹⁵⁾”等が所蔵されている。これらについては現在分析中である。

3. 米国議会図書館マニスクリプト部門

Manuscript Division, Library of Congress, Washington D.C. (LOC)

1) 保存史料へのアクセス

議会図書館研究センター(写真4)マニスクリプト部門では国政、連邦政府、外交、軍事、科学史等に関する個人的な書類や組織の記録が保存されている。本部門は日記・書簡等いわゆる手書き文書を含む個人の記録が中心である。ワシントンDCの米国政府機関が立ち並ぶ一角にあり、入退館時にはセキュリティーチェックがある。本部門の利用に際しては事前予約と身分証明書の提出が必須である。持ち込めるのはPC、カメラ。鉛筆やメモ用紙は閲覧室に用意してある。ノートやファイル等は原則持ち込み不可。閲覧室の入退出に際しても厳重なチェックが行われる。LOCマニスクリプト部門は、ワシントンDCの国立公文書館と並ぶ史料の宝庫である。



写真4 議会図書館

2) 開拓使及び札幌農学校と米国政府関係史料

開拓使へのケプロン他招聘に関与した政府関係者として国務長官フィッシュ、農務長官ケプロン等の史料が閲覧可能である。フィッシュ文書には交渉時中弁務使として活躍した森有礼書簡等も保存されている。ケプロン文書所収の日記類は『ケプロン日誌¹⁶⁾』としておよそ活字化されている。また、大統領グラント将軍の関係文書はデータアーカイブで閲覧できる。北海道を巡る米露の動向がうかがえる史料もある。札幌農学校開設は北海道開拓政策の一環であり、米国政府による積極的な支援には対ロシア政策という政治的経済的な背景があったことを踏まえた史料へのアプローチが必要である。

4. スミソニアン協会文書館(スミソニアン図書館・文書館)

Smithsonian Institution Archives, Smithsonian Libraries and Archives

1) 保存史料へのアクセス

アーカイブに事前にメールで問い合わせる。アーカイブはワシントンD.C.の中心地下鉄ルエンファント・プラザL'Enfant Plaza駅に直結する建物の中に入っている。筆者は森有礼の米国ネットワークに早くから登場するスミソニアン・インスティテューション(1846創設)の初代長官で物理学者のジョセフ・ヘンリー(Joseph Henry)がケプロンからの依頼を受け、北海道開拓に同行する専門家の人選にも関与したことに注目した。ヘンリーはリービッヒやファラデーと同時代人でプリンストン大学教授も務めた米国を代表する科学者である。

2) 英独米日科学者ネットワークの構図

ケプロンから依頼されヘンリーが推挙した地質学者ライマンは、後に北海道の地質調査を実施するなかで、榎本武揚とも交流があった。榎本武揚は1872年1月に黒田清隆らの尽力で出陣し同年3月8日には開拓使四等出仕、北海道鉦山検査拝命となっている¹⁷⁾。榎本は幕末の長崎海軍伝習所およびオランダ留学で学んだ化学者でもあった。米国科学界のキーマンであるヘンリーが、筆者が作成した英独科学者(農芸化学)に加わるにより、英独米日の近代農学導入

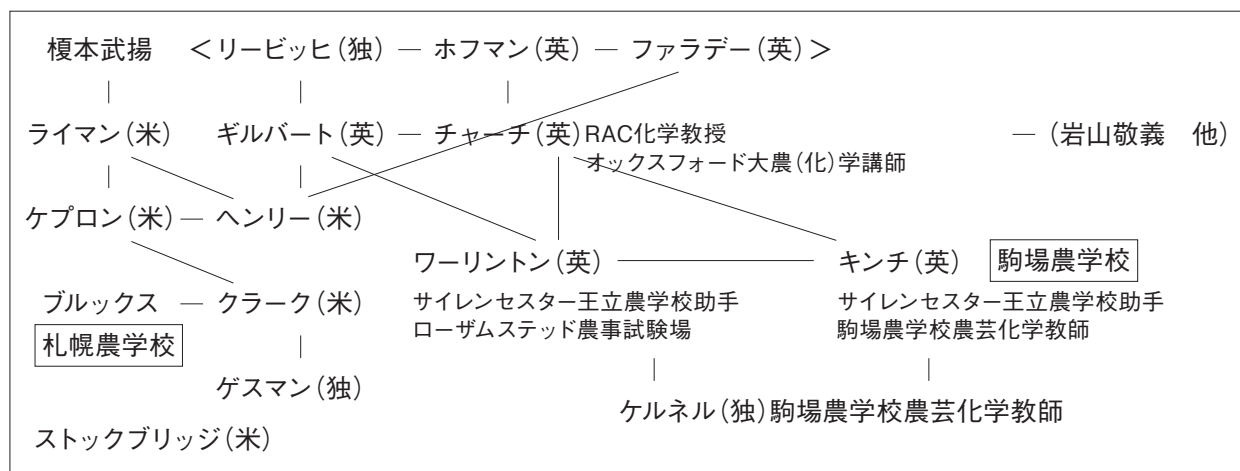


図1 近代農学導入に関わる英独米日の科学者ネットワーク

に直接的あるいは間接的に関わった科学者のネットワークの構図(図1)が明らかになりつつある。

5. おわりに

北海道開拓の核となった農工技術者養成の学校と農事試験場はケプロンらが構想にかかわり、MAC学長クラークにより実践に移された。しかし、札幌農学校が農科大学への昇格を意識するまではキリスト教倫理に基づく中等教育レベルの専門基礎教育を担い、農学に留まらない全人教育的な独自性を有した。このような教育が行われた背景には、札幌農学校がモデルとしたMACの教学方針がある。

「なぜクラークなのか」「なぜMACなのか」を解明するには、さらなる縦断的、横断的な史料探索が必要である。また加えて、研究に取り組む際には先入観を排し、事実を追究する姿勢を堅持することが重要である。多角的かつ総合的なアプローチこそが、新たな知見を得る原動力となる。これらの研究をさらに深めるために、今後も米国図書館・文書館での資料探索を継続していきたい。

注

- ¹ 田中彰「札幌農学校と米欧文化」(北海道大学編『北大百年史 通説』ぎょうせい、1982年) 503頁。
- ² 同前、500頁。
- ³ 北海道大学編『北大百年史 通説』ぎょうせい、1982年。同『北大百年史 札幌農学校史料(一)』1981年。同『北大百年史 札幌農学校史料(二)』1981年。
- ⁴ 三好信浩『増補日本農業教育成立史の研究』風間書房、2012年。
- ⁵ 立川明「二つの科学とランド・グラント・カレッジ：マサチューセッツの場合」(『日本の教育史学』30巻、1987年、129-148頁)。
- ⁶ Letter from Professor Clark to Professor Goessmann in Amherst, 2/9/1876 (Charles Anthony Goessmann Papers, Robert S. Cox Special Collections and University Archives Research Center, UMass Amherst Libraries)。本書簡は、拙稿「欧米農学導入期における札幌農学校の教育 — マサチューセッツ農科大学化学教授ゲスマン宛クラーク書簡を中心に —」付記(『大学史研究』29、2021年)に翻刻全文を掲げた。
- ⁷ Letter from Charles Wolcott Brooks, Japanese consul in San Francisco (William Smith Clark Papers, Robert S. Cox Special Collections and University Archives Research Center, UMass Amherst Libraries)。本英文書簡の翻刻及び和訳は教

育史学会第68回大会(28/9/2024)「札幌農学校の創設と展開—北海道開拓をめぐる日米史料の分析から—」レジュメ参照。

- ⁸ 農林省『農務顛末 第六卷』1957年、858頁。
- ⁹ *The Agriculture of Japan*, William Smith Clark Papers, Robert S. Cox Special Collections and University Archives, Research Center, UMass Amherst Libraries.
- ¹⁰ *Prize Agricultural Essays*, Stockbridge, Horace: Correspondence and Publications, Levi Stockbridge Papers, Robert S. Cox Special Collections and University Archives Research Center, UMass Amherst Libraries.
- ¹¹ Capron, Horace. *Memoirs of Horace Capron*. 1884. Special Collections, USDA National Agricultural Library.
- ¹² Ōsaka, Shingo. *Hōresu Kepuron o kataru*. 1956. Special Collections, USDA National Agricultural Library.
- ¹³ Tanimura, Issa. *General Horace Capron: The Friend of Japan*. 1937. Special Collections, USDA National Agricultural Library.
- ¹⁴ 手塚竜磨「国際人・谷邨一佐の修学と事業」(『英学史研究』第16号、27～32頁)。
- ¹⁵ “*Life and Resources in America*”は東京農業大学図書館にも所蔵されている(大正13年に橋口家寄贈)。橋口文蔵は1853年生まれ。鹿児島藩出身。1876年に米国留学、1881年にボストン大学、MAC農学士。帰国後、開拓使、農商務省、北海道庁を経て、1888年札幌農学校校長兼北海道庁三等技師。1894年に榎本の計画にかかわり、墨西哥国移民地探検嘱託。1903年死去(51歳)。妻千賀子は黒田清隆の長女。中表紙に貼られたパラフィン紙に「Bought from New York. April 25th 1872. SKTakahashi」とあり、購入者は文部省公費派遣の鹿児島藩出身高橋新吉と判明した。
- ¹⁶ ホーレス・ケプロン著・西島照男訳『ケプロン日誌 蝦夷と江戸』北海道新聞社、1985年。開拓使外事訳『開拓使顧問ホラシケプロン報文』開拓使、1879年、177頁。
- ¹⁷ 榎本隆充編『榎本武揚未公開書簡集』新人物往来社、2003年、236頁。1873年3月に「ケプ

ロンとの対立表面に出る」とあるが根拠は示されていない(年表)。

* 本研究はJSPS科研費JP15K04249、JP20K02494助成を受けたものである。

謝辞 Acknowledgements

I would like to express my sincere gratitude to the Robert S. Cox Special Collections and University Archives Research Center, University of Massachusetts Amherst Libraries; the National Agricultural Library; the Manuscript Division, Library of Congress, Washington D.C.; and the Smithsonian Institution Archives, Smithsonian Libraries and Archives for their invaluable assistance in researching historical materials for this report. I am also deeply grateful to Amanda Ray, Special Collections Archivist at the National Agricultural Library, and Diane Wunsch, former Special Collections Librarian at the National Agricultural Library, as well as Deborah Shapiro, Archivist at the Smithsonian Institution Archives, Smithsonian Libraries and Archives, for their dedicated support and guidance.

Google Apps Script(GAS)を利用した 農学生命科学図書館施設予約の自動化

Automating the facility reservation at University Library for Agricultural and Life Sciences using Google Apps Script(GAS)

安達 修介*

1. 取り組みの概要

東京大学農学生命科学図書館には、学習用個室7室(施設名称:「閲覧個室」)とグループ学習室3室(施設名称:「ゼミナール室」「会議室」)の2種類の館内施設があり、ともに利用予約を受け付けている。2024年度、この施設予約をGoogle Apps Script(以下GAS)で自動化する取り組みを行った。

2. 取り組み前の問題点

以下のような問題点が背景にあり、自動化による改善を目的として取り組みを行った。

1) 全般的な問題点

- ・予約可能時期等の運用の違いがあるため受付手順が統一されておらず、作業時に混乱をきたすことがあった。
- ・予約キャンセルの度に利用者と職員との間でメールのやり取りが必要で、お互いにメール送信のコストがかかっていた。
- ・「紙の利用票」と「利用一覧表」を基に手動で施設利用統計をとっているため作業が煩雑で、統計の正確性に問題があった。

2) 学習用個室

- ・従来から前日予約はGoogleフォームで受

付をしており、午前8時半時点の予約状況が自動で出力できるようになっていた。一方当日予約はカウンターで受け付ける運用になっており、当日予約分は利用者用と職員用に二か所に設置している一覧表を逐次手作業で追加・修正をする必要があり、他のカウンター対応を圧迫することがあった。また、新規予約やキャンセルの際の手書きによる修正・追加で予約状況が分かりづらくなっていた。

- ・1年365日分の予約可否を記載したスプレッドシートを年に一度作成してGoogleフォームに反映していたが、更新作業が煩雑で誤りも発生しやすくなっていた。

3) グループ学習室

- ・予約受付にはGoogleフォームを用いていたが、申込があった日付・時間枠についての予約可否確認、受付メールの送信、予約番号採番は職員が目視・手動で行わなければならず、受付ミスの原因になっていた。また、予約内容を手動で予定管理ツールへ反映する必要があった。
- ・研究科契約の予定管理ツールを利用して施設予約状況を公開していたが、費用負担の増大と管理体制の問題によりツールの契約

* (執筆当時) 東京大学農学生命科学図書館 〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1

* Shusuke ADACHI University Library for Agricultural and Life Sciences, the University of Tokyo. 1-1-1 Yayoi, Bunkyo-Ku, Tokyo 113-8657 JAPAN.

終了が検討されており(その後契約は終了)、別の手段を用いる必要が生じた。

- ・予約をした部屋を当日利用する際、利用票に予約者のサインを求めているが、利用票の様式が統一されておらず、また、Google フォームから送信されてきたメールを利用票として用いることも多かったため、利用票の準備に時間がかかり、利用票に職員名が印刷されていることもあった。

3. 取り組みの内容

Microsoft Copilotを活用しながらGASを作成し、以下の機能・運用を実現させた。

1) 全般

- ・グループ学習室の予約を研究科契約の予定管理ツールに登録する方法から、学習用個室と同様にGoogleカレンダーに登録する方法に変更した。ただし、学習用個室とグループ学習室の予約状況管理は、それぞれ別のGoogleカレンダーを用いている。
- ・予約キャンセル用のフォーム(Googleフォーム)を運用開始。GASを用いて、Googleカレンダーに登録された予定を自動で確認してキャンセル対象の予定を削除し、利用者にキャンセル受付メールを自動で送信するように設定した。
- ・手作業で集計していた利用統計は、GASを用いてGoogleカレンダー上の予定を自動で集計して記録用スプレッドシートに記録されるようにした。

2) 学習用個室

- ・職員がカウンターで対応する当日予約について、Googleカレンダーを直接編集するよりも操作性を高めるため、専用のフォーム経由でGoogleカレンダーへの登録を可能にした。
- ・Googleカレンダーに登録されている予約は、GASを用いて部屋番号と時間枠によって整列させて表示させるスプレッドシートを作成し、それを端末に表示させて職員・利用者双方が予約状況を確認できるようにした。また、予約状況をウェブで公開し、利

用者が来館しなくても学習用個室の予約状況を確認できるようにした。

- ・従来から学習用個室の前日予約用のフォーム(Googleフォーム)は予約可否の判定にGASを用いていたが、予約不可の日のみをスクリプト内で指定する方式に変更し、1年365日について予約可能日を確認するためのスプレッドシートは廃止した。

3) グループ学習室

- ・グループ学習室の予約フォーム(Googleフォーム)について、GASを用いてGoogleカレンダーに登録された予定を自動で確認して予約可否を判定し予約受付・予約謝絶メールを利用者に自動で送信する設定にし、予約番号は自動で採番されるようにして予約をGoogleカレンダーに自動で登録させた。
- ・従来は予約フォームの予約日入力欄が3日分しかなく、それ以上の予約については備考欄に入力することになっていたが、15日分の入力欄を用意し、入力した全日程について自動で予約可否を判定できるようにした。
- ・予約受付が完了した日付・時間枠については、利用票を自動で生成して印刷するだけでよいようにし、誰が対応しても同じ利用票を作成できるようにした。

4. 取り組み後の成果

取り組みを行った結果、以下の成果が上がった。

1) 利用者の利便性の向上

- ・グループ学習室の予約申込が自動で完了するようになったため、職員の勤務時間の影響を受けることなく予約が可能になった。
- ・予約のキャンセルがフォームを介して申込できるようになったため、職員の勤務時間の影響を受けることなく申込が可能になった。
- ・予約のキャンセルが自動で予約状況に反映されるようになったため、キャンセル後の時間枠を他の利用者がすぐに予約すること

が可能となった。

- ・学習用個室の当日予約の職員の作業が、手書きからフォーム経由の簡単な操作に変更されたため、利用者のカウンターでの待ち時間が短縮された。

2) 職員の負担軽減・ミス削減

- ・学習用個室の予約状況の確認・カウンターでの表示のために、毎朝一覧表2枚の印刷を行っていたところ、表示用の端末を起動させるだけの作業になった。また、1日につき10～15件ほどある当日の予約は、対応時には2枚の一覧表に逐次手書きで新規予約を記入していたが、フォームの操作1回で済むようになった。
- ・グループ学習室の予約受付は、年間300回弱、1回につき最大15件の予約をそれぞれ予約状況の確認をし、手作業で予定を登録して予約受付メールを送信し、利用票を用意してカウンターに設置していた。この準備作業が、職員メールに自動送付される利用票を印刷したものをカウンターに設置するだ

けになった。

- ・グループ学習室の予約について、部局独自契約の外部ツールに依存しない予約システムを構築できた。
- ・グループ学習室の統計作業は毎月利用票を手作業で集計し、学習用個室の統計作業は毎朝前日分の予約一覧表の記録内容を手作業で集計していたところ、基本的に職員が行う作業がなくなり、グループ学習室については月に120分程度、学習用個室については毎日5～10分程度の業務時間削減に繋がった。
- ・予約のキャンセル(グループ学習室：月に2～3件/学習用個室：日に1件程度)は、受付毎にメール返信と予約一覧表からの削除を行っていたが、基本的に職員が行う作業がなくなった。
- ・各工程において職員の作業が減ったことで、軽微な入力・転記等のミスなど、利用者の不利益につながる可能性のあるヒューマンエラー発生が0件になった。

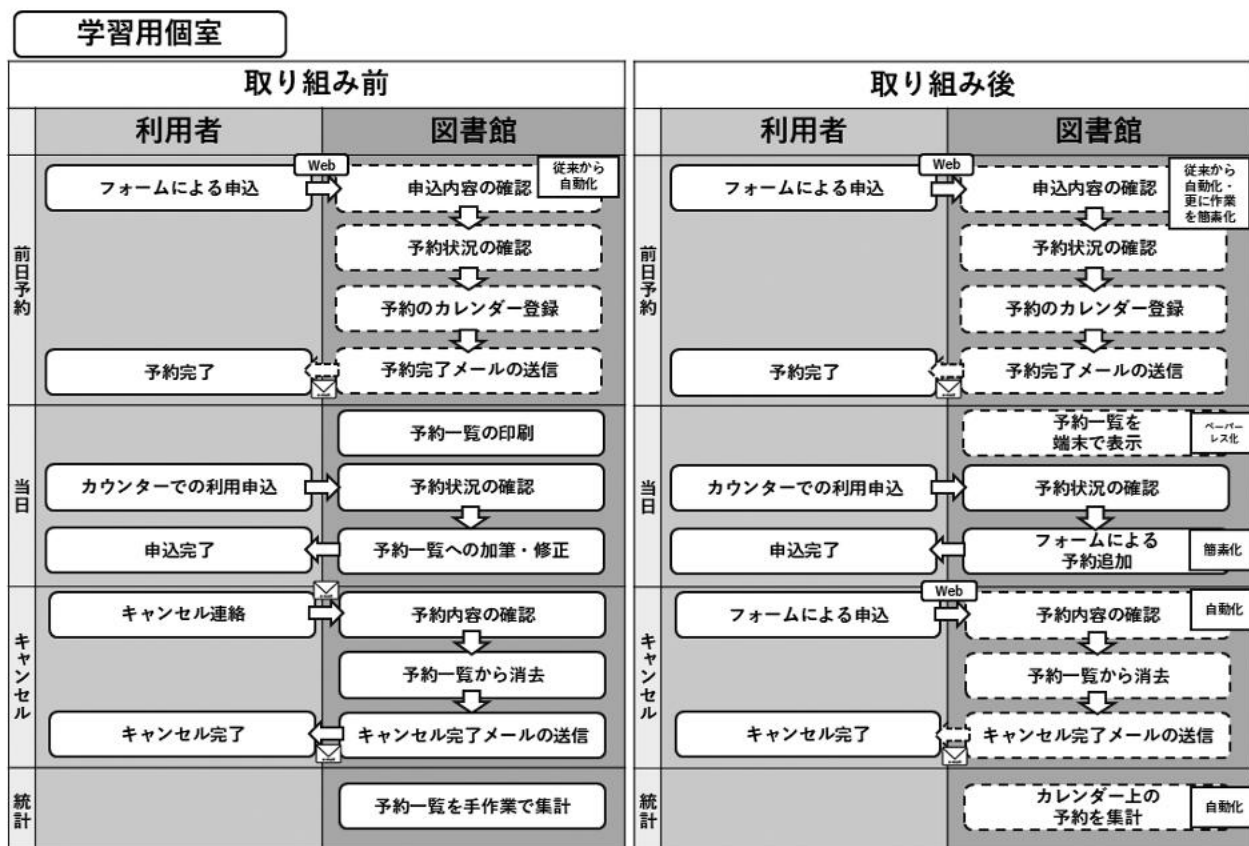


図1 取り組み前後の業務の比較(学習用個室)

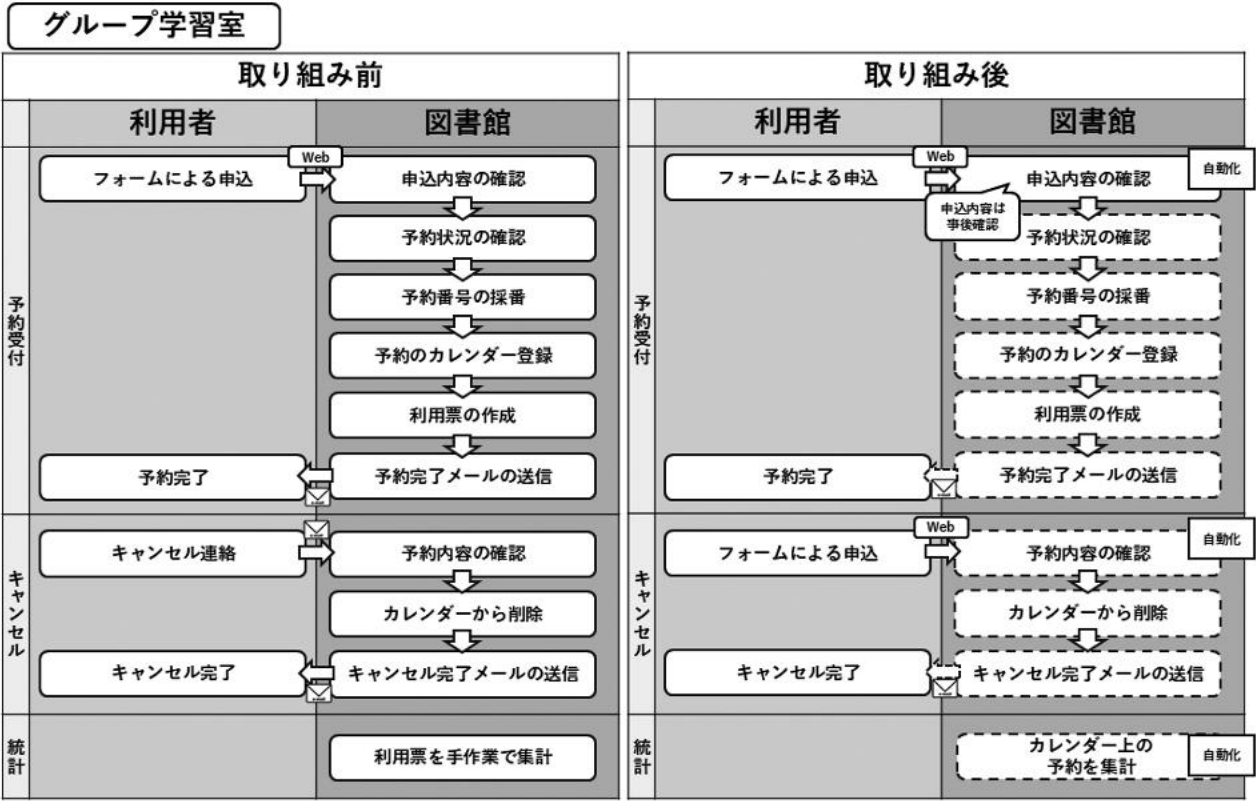


図2 取り組み前後の業務の比較(グループ学習室)

5. 今後の展開

今後の展開として、まず業務の引継ぎの観点から、分かりやすいGASの編集説明や編集しやすいGASのコードへの編集に対応することが挙げられる。

また、図書館に来なくても当日の予約状況を確認できるようにしたが、この機能が今一つ活用されていないように見受けられるので、利用者への周知を図っていきたい。

学生アルバイトとの協働による蔵書点検や資料の移設作業について

Book inventory checks and material relocation work in collaboration with student part-timers.

林 成吾*

1. 図書館概要

本学には、岡山と今治の2つのキャンパスがあり、今治には獣医学部が、岡山にはその他の7学部が開設されております。収容定員は、岡山：6,470名、今治：1,080名、蔵書数は、2023年度末現在で岡山：466,557冊、今治：20,778冊の中規模の図書館です。

職員数は、岡山：正職員3名、嘱託職員1名、社会人アルバイト3名、今治は完全委託です。岡山キャンパスには3つの図書館の建物があり、今治キャンパスには1つの図書館の建物があります(いずれも他の施設との併設)。

2. はじめに

従来、蔵書点検や資料の移設(配置調整)作業については、図書館職員で行っていましたが、職員数の減少や一部業務の委託などで、作業に携わることのできる人数が大きく減ったため、これらの作業の実施が難しくなっていました。このため、今年度初めて学生アルバイトによる蔵書点検を実施しました。

学生の夏休み期間に資料の移設と蔵書点検を、冬に蔵書点検を行いました。

今回は発表時間の兼ね合いと冬の作業は発表用に数値をある程度まとめておいたこともあり、冬の蔵書点検の例をご紹介します。

す。

3. 2024年12月の蔵書点検

対象：A2号館図書館の2階と3階の2フロアの68,352冊。

7段5連複式の書架24本に配架。

作業日数：12/24-26の3日間

作業人数：職員2名+学生アルバイト約10名
(学生延数31.25人)

作業班数：11班。ノートPC11台を使用。

読込速度：資料IDの読み込みに11時間弱を要し、概算の平均読込速度=565冊/h@1人。

紛失確認：紛失資料の棚チェックは、紛失資料リストを基に、棚に本当にか(読み飛ばしや誤入力)の確認を行いました。リストに上がった冊数は841冊。一次チェックでは476冊が発見されました。この期間の後職員により2次チェックを行っており、60冊が発見されています。約10年ぶりに行ったエリアであったので、紛失冊数は多い結果となりました。

費用概算：アルバイト料概算額=224千円(@982円)

*岡山理科大学 〒700-0005 岡山県岡山市北区理大町1-1

Seigo HAYASHI, Okayama University of Science Library, 1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama, Japan 700-0005

表1 蔵書点検作業スケジュール

時間	12月24日	12月25日	12月26日
9:00-	作業説明、PC 設置	ID 読込	紛失資料の棚チェック
10:00-	PC 設置後、ID 読込	ID 読込	紛失資料の棚チェック
11:00-	ID 読込	ID 読込	紛失資料の棚チェック
12:00-	昼休み	昼休み	昼休み
13:00-	ID 読込	ID 読込	紛失資料の棚チェック
14:00-	ID 読込	ID 読込	紛失資料の棚チェック
15:00-	ID 読込	ID 読込	書架整理
16:00-	ID 読込	PC 撤収	書架整理

IDの込速度が従来職員で行っていた頃は、800~1000冊/hでしたが、慣れていない学生であるため、そこまで早くは読めなかったようです。また、紛失資料リストに上がった数が多かった、つまり読み込みがちゃんとできていなかったものも多かったと言えます。そのため、チェックに時間がかかってしまいました。

最初の作業の説明で、もっと細かく読込の注意点を説明しておくべきだったと、反省しています。とは言うものの、目的の作業は予定時間内に終わりましたので、職員がコントロール役になり、学生アルバイトに作業してもらっても、蔵書点検など人海戦術で行う作業は十分行えることがわかりました。

4. 2024年8-9月の作業

最後に夏の作業について、できる限り数字をまとめましたので、参考としてください。

表2 資料の移動冊数

所在	冊数	作業	小計
A2/3F 分類 3*	11,627	並べなおし	17,542
K コーナー	5,915	並べなおし	
V コーナー	2,450	移動	9,043
R コーナー	1,549	移動	
C コーナー	1,535	移動	
閉架図書	1,401	移動	
A2 視聴覚資料	1,377	移動	
博士論文	731	移動	
新聞	書架 2 本分	移動	書架 2 本分
C2 林原文庫雑誌	書架 6 連分	移動	書架 6 連分
合計	26,585		26,585

表3 蔵書点検冊数

所在	冊数
A1 一般	55,684
C2 一般	35,803
C2 特設	1,173
C2 林原文庫	1,229
合計	93,889

当初は、資料の移動作業のみを予定していましたが、前倒しで終了できたため、急遽蔵書点検も行いました。若い学生が作業に携わってくれたことで、作業が思った以上にはかどった結果といえます。

表4 作業日数・学生アルバイト人数

作業期間	17 日
1 日の作業時間	5 h
1 日の参加人数	6-11 人
学生アルバイト延数	137.5 人

※職員 2 名

—— 第131回農学図書館情報セミナー報告 ——

「大学図書館をめぐる最新動向を探る
～オープンアクセス加速化事業について」

2025年3月7日(金)15:00～16:30オンライン方式で、農学図書館情報セミナーを開催した。

今回のテーマは「大学図書館をめぐる最新動向を探る ～オープンアクセス加速化事業について」をテーマに以下の講演が行われた。

①「学術情報のオープンアクセスに関する国内の動向」

南山 泰之氏(情報・システム研究機構国立情報学研究所 オープンサイエンス基盤研究センター 特任助教)、(オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR) 運営委員会委員)、(研究データ利活用協議会(RDUF) 企画委員会委員長)、(情報科学技術協会(INFOSTA) 理事)

～大学図書館からの事例紹介～

②「Google Apps Script(GAS)を利用した農学生命科学図書館施設予約の自動化」

安達 修介氏(東京大学農学生命科学図書館)

③「学生アルバイトとの協働による蔵書点検や資料の移設作業について」

林 成吾氏(岡山理科大学図書館)

本セミナーの申込者数は51名であった。またセミナー後のアンケートでは、とても参考になったとの好評の声が寄せられた。

以下、各講演の概要を報告する。

演題1：「学術情報のオープンアクセスに関する国内の動向」

講師：南山 泰之氏(情報・システム研究機構国立情報学研究所 オープンサイエンス基盤研究センター 特任助教、オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR) 運営委員会委員、研究データ利活用協議会(RDUF) 企画委員会委員長、情報科学技術協会(INFOSTA) 理事)

要旨：近年、オープンアクセス加速化事業を筆頭に、学術雑誌論文及び研究データのオープン化に関する政策が急速に進められている。本講演では、オープンアクセスの説明から始まり、政策的な動向、関係者による取組、今後の方向性が紹介された。

質疑応答：

Q1 機関リポジトリでの学術論文の登載が増えているようですが、大学による進展の違いはあるのでしょうか。あるとすれば、その理由はどのようなことが想定されますか。

A1 論文の数についてはオープンアクセス加速化事業が始まる前から差がある。Green OAはどこかで投稿されて読まれることが想定されるのであまり登録する価値はないと考える機関もあり、その辺の温度差はあるように感じている。

Q2 オープンアクセス加速化にむけて、各大学図書館でも機関リポジトリで対応をしているところもあるが、Green OAの登録で注力すべき点があればご教示いただきたい。

A2 機関リポジトリに登録する際に、実務的に課題になると言われていることは、研究者がメタデータを作っている程度登録しているが、メタデータの内容があまり整理さ

れていない。また著者最終稿ということで出されてくる論文が、出版社のポリシーを確認されないまま投稿されるのでリポジトリ管理者側は登録の可否について再度調べるのに苦慮していると聞いているオープンアクセス加速化事業の取組として、NIIや各機関がシステム化の取組をしていると思うので、それがカバーできるとよりやりやすくなる気がしている。今回オープンアクセスの義務化にあたり、根拠データの場合は公開論文の書誌情報があるので良いですが、研究データに対してどのようなタイトルをつけるか、またデータが他で公開されていた場合は自大学で登録するのか、また要領はどうするのかなどの実務的な課題が山積している。それをどこまでカバーするのかは指針として決まっておらず、いろいろな機関が手探りでやっている状態のためいわゆる相場観がない。各研究者のコミュニティでデータベースを作っているものは、当然その研究者間でわかるように作っているので参考にはできても機関リポジトリでそれをやるのは適切かどうかわからないという悩みは聞いている。この辺も議論を重ねながら進めなければいけないところで、まだ答えがあるわけではないが、実務レベルでの情報共有を進める必要があると感じている。

Q3 紀要論文が10ポイント減、ジャーナル論文が5ポイント増とのことだが、紀要論文が下がった10ポイントを埋めている5ポイントはデータなのか？

A3 データではなさそうである。中身を見ると、conference paper や articleそしてresearch reportのような幅広いものが登録されているようである。Journal articleの登録定義は難しく、査読論文の登録がある一方、査読されていない論文も登録されているなど機関のポリシーによって異なる。またarticleについて、articleと記載はあるが査読なしだけでなく査読あり論文も多少入ったり、混在しており定義によって異なってくる。したがって、前向きに捉えたと研究成果の公表先としてリポジトリを

選択する幅が増えてきた結果だと思う。

Q4 メタデータについてですが、研究者が自分で入力することになると、同じようなコンテンツでも別の表現になったりしないのでしょうか。なにか統制するしくみがあったり、検索でカバーできる仕組みがあったりしますでしょうか、大学図書館員等の関与などがあればいいように思います。

A4 ご懸念の通り、研究者が論文及び根拠データのメタデータを入力する場合、標記の揺れや共同研究者との重複入力といった課題が生じると思われる。あいにく機関リポジトリ側でこれらを統制する仕組みは聞き及んでいないが、CiNii Researchでは重複コンテンツと思われるものを機械的に特定、統合する仕組みがあるので、同サービスの検索上ではある程度カバーされるものと思われる。ただし、これから登場する事例に対してどの程度有効かは未知数と言わざるを得ないかもしれない。

Q5 即時OA政策のうち、「政府による出版社との交渉体制構築の支援」の最新動向についてご存じであればご教示ください。

A5 政府による出版社との交渉体制構築支援については、東北大学附属図書館が事務局を務めるOASEという取り組みがある。[\(https://oase.jp/\)](https://oase.jp/) まだウェブサイトが立ち上がって間もなく、所属メンバーも記載がないためどういう取り組みになるのか外部からうかがい知れない状況であるが、恐らく転換契約の先駆けとなった大学・研究機関の方々が参加している、と推察している。

～大学図書館からの事例紹介～

演題2：「Google Apps Script(GAS)を利用した農学生命科学図書館施設予約の自動化」

講師：安達 修介氏(東京大学農学生命科学図書館)

要旨：東京大学農学生命科学図書館内にある学習用個室 7 室とグループ学習室 3 室につい

て、2024 年 6月から、Google Apps Script を用いて利用予約の受付を自動で行えるようにしている。予約方法から始まり、自動化前と自動化後の違い、取組後の改善点について講演があった。

質疑応答：

Q1 この予約アプリの開発で、Microsoft Copilotをどのように活用されたのか、もう少し詳しくご説明頂けますか。

A1 スプレッドシートに回答が記録された時にこの列に登録された回答を基に、こういう処理をしてほしいということをCopilotに投稿するとコードが出てくる。そのコードをテスト用のスプレッドシートのGAS記入欄に書き込んで試してみてもうまく動かなかった場合、検証を行いその結果をもとにコードを修正したり別のコードに書き換えるようCopilotに指示をだしたりすることを繰り返していた。

Q2 こちらを進める際、担当職員が1人で対応を進めたのか、それとも複数の職員が進めたのかを伺いたい。

A2 今回の取り組みは私が主担当となって主に1人ですすめた。もともと前任者が自動化を進めていたものを更新し自動化した。事業の引継ぎについては、マニュアル等で対応を考えている。

演題3：「学生アルバイトとの協働による蔵書点検や資料の移設作業について」

講師：林成吾氏(岡山理科大学図書館)

要旨：従来、蔵書点検や資料の移設(配置調整)作業については、図書館職員で行っていましたが、職員数の減少や一部業務の委託などで、作業に携わることのできる人数が大きく減ったため、これらの作業の実施が難しくなった。このため、今年度初めて図書館学生アルバイトによる資料の移動と、蔵書点検を実施した。この概要について講演があった。

質疑応答：

Q1 本取り組みの際にはどのような状況で蔵書点検にどのような課題があったか伺いたい。

A1 以前は少しずつ作業をしていたが職員数が減ったため、今回実施したエリアは10年ほど蔵書点検ができていなかった。そのため紛失冊数が多くあり、検索結果に紛失した資料がヒットするという不具合が生じていたためそれをどうにかしたかった。しかし廃棄の作業が狭隘化の緩和が大きい課題となっていたためそちらに力をそがれ、蔵書点検ができていなかった。そこで大学からコロナの頃に、図書館で学生アルバイトを雇っても良いという方針がでたことをきっかけに学生に蔵書点検をしてもらうことになった。

Q2 昨年までは、職員だけで行っていたのでしょうか。作業期間がかなり短縮できたとの理解でよろしいでしょうか。

A2 昨年は行っていなかったが、一昨年は実施していた。読み込み期間として約3日間を想定してできる範囲で行っていたが、学生アルバイトを雇うことでやれる範囲が広がった。以前は約4万冊～5万冊の点検をおこなっていたが、学生アルバイトにした際、年2回 約15万冊の点検が実施できた。

以上

長塚会長あいさつ

3名の講師の方から非常に興味深いご講演をいただきありがとうございました。今後より工夫をしていかなければいけない領域なのかと思いました。今後も継続して農学図書館関係の共通な課題として議論が必要と感じました。

最後に沢山の方にご参加いただきありがとうございました。

以上で閉会となった。

文責：海野かおり(東京農業大学図書館事務部)
セミナー委員会委員

オーストラリアのクイーンズランド大学農学部図書館を訪問して

A visit to JK Murray Library at the University of Queensland

Gatton campus in Australia

長塚 隆*

筆者は、オーストラリアのブリスベンで 2024 年 9 月 30 日から 10 月 2 日まで開催された国際図書館連盟 (IFLA) が主催する新たな形式の国際的なイベント「IFLA 情報未来サミット」¹⁾に参加する機会があった。

最初に、「IFLA 情報未来サミット」について簡単に紹介する。その後、サミットの終了後にブリスベン市のクイーンズランド大学図書館²⁾と郊外にある農学部図書館を先方の図書館員の手厚い配慮により訪問することができたので、オーストラリアの大学図書館がコロナ禍を経験して、どのように変化しているのかについて、体験したことを踏まえて紹介したい。

1. 国際図書館連盟 (IFLA) 情報未来サミット

国際図書館連盟 (IFLA) 情報未来サミットは、世界 70 カ国から 770 名が参加して、オーストラリア・ブリスベン市で開催された。ブリスベンはオーストラリアのクイーンズランド州の州都であり、シドニー、メルボルンに次ぐ人口 200 万を超えるオーストラリア第三の都市である。IFLA 会長ビッキー・マクドナルドが館長を務めるクイーンズランド州立図書館³⁾の所在地でもある (写真 1)。

毎年、2,000 名から 4,000 名以上が参加して開催されてきた年次大会に比べると、一回り小さな規模であった。しかし、本サミットの開催中

には参加者相互で活発な議論が交わされた。

例年の年次大会と比較して、次のような点が異なっていた。

ポスターセッションやオープンセッションの代わりに、本サミットでは個人の発表として「イグナイトトーク」が新設され、様々な各国での図書館での取り組みや最近の生成 AI の普及による図書館への影響や活用などに関して、多くの国の図書館員や大学の教員などから発表が行われ、各国における生成 AI への関心の高さが窺えた。詳細は著者による報告を参照願いたい⁴⁾。



写真 1 IFLA 会長ビッキー・マクドナルド

* 鶴見大学名誉教授 〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3 * Takashi NAGATSUKA, Tsurumi 2-1-3, Tsurumi-ku, Yokohama, Japan 230-8501 nagatsuka-t@tsurumi-u.ac.jp

2. クイーンズランド大学図書館

オーストラリア・クイーンズランド州の州都ブリスベンに大学本部があるクイーンズランド大学は、1909年に設立され、100年以上の歴史を持つ、オーストラリアのなかでも教育と研究の分野で中心的な大学のひとつである⁵⁾。

大学は4つのキャンパスからなり、そのうちのひとつが農場や農学部があるガトン (Gatton) キャンパスである。ガトンキャンパスはブリスベンの中心から87キロメートルの内陸にあり、1,000ヘクタールを超える農場が併設されている広大なキャンパスである。ガトンキャンパスの農学部図書館の紹介の前にクイーンズランド大学の概況を見てみよう。

クイーンズランド大学は、2025年のQS世界大学ランキングでは40位にランクされており⁶⁾、世界の上位100位に入るオーストラリアの中心的な大学のひとつである。ちなみに、我が国の大学では東京大学が32位、京都大学が50位にランクされている。

クイーンズランド大学の全学生数は約5万5,000人(2023年)で、そのうち2万2,000人は海外からの留学生であり、非常に国際化が進んだ大学と言える⁷⁾。

今回のクイーンズランド大学図書館および郊外にあるガトンキャンパスの農学部図書館への訪問は、IFLA 情報未来サミット会議後の「図書館訪問」の企画に登録されたクイーンズランド大学図書館のタンヤ・ジーベル女史の手厚い配慮で実現したことであり、大変感謝したい。

クイーンズランド大学セントルシアキャンパスは大学の中心キャンパスであり、図書館本館と6つの図書館分館が配置されている(写真2)。



写真2 クイーンズランド大学キャンパス



写真3 クイーンズランド大学図書館入口

そのうちの本館と4つの図書館分館は24時間開館しており、学生や教員がいつでも利用できるようになっている。10月4日の正式の訪問の他に、一人で館内を見学したときにも、多くの学生が滞在しており、図書館がよく利用されていることを実感した。

大学にはセントルシアキャンパス以外に3つのキャンパスがあり、その内のひとつが農学部ガトンキャンパスである。それぞれのキャンパスにひとつずつ図書館分館があり、大学全体では合計9つの図書館が配置されている。

クイーンズランド大学セントルシアキャンパスの図書館本館は10月4日にタンヤ・ジーベル女史に詳しく案内して頂き、大学の教育と研究の支援のために、様々な工夫をしていることがよく理解できた(写真3)。その一端を紹介することにしたい。

図書館のホームページには、「当図書館は、アボリジニおよびトレス海峡諸島民の文化に関する資料を保存管理している」との宣言が述べられ、オーストラリアにおける多様な文化の保全に尽力していることが表明されている²⁾。

図書館本館では、4階分が学修ゾーンになっており、グループ学習や個人で静かに学修出来るスペースなど合計1,100あり、学生が様々なスタイルで学修に励んでいた(写真4、5)。

これらの学修ゾーンは24時間使用できるようになっており、通常の学修スペースには、ペ

ットボトルやコールドフードに限り持ち込める。ただし、図書館内に電子レンジなどが設置され食事（ホットフード）がとれるキッチンコーナーが設置されており、長時間の滞在も可能となっている。



写真4 クイーンズランド大学図書館
学修コーナー



写真5 クイーンズランド大学図書館
学修用ブース

図書館内にレファレンス・IT 支援コーナーが設置しており、図書館員が図書などのレファレンスに対応するほかに、学生に対してネットワークやパソコンの利用に当たって困難があった場合に、図書館の技術職員によるサポートをアピールしていた（写真6）。図書館として技術系の職員を採用して、学生へのIT 技術サポートを



写真6 クイーンズランド大学図書館
レファレンス・IT 支援コーナー

充実させていることが印象的であった。

また、興味深かったのは研究支援コーナーが目立つところに設置しており、担当の図書館員が待機していたことである（写真7）。後述するが、担当の図書館員は農学部があるガトンキャンパス図書館でのサポートも週1日訪問して行っていた。ガトンキャンパスの訪問時に一緒にになり、色々話を聞く機会があった。担当者はIT系の仕事の後で、図書館員を目指し、図書館大学院を卒業後にクイーンズランド大学図書館に職を得たようであり、図書館では様々な経歴のスタッフを採用しているようである。



写真7 クイーンズランド大学図書館研究支援

生物科学系の図書館も24時間利用でき、本館ほどではないが、多くの学生が利用していた（写真8）。グループで学修出来るスペースや静かに個人で学修出来るスペースなどが充分取られており、大型のディスプレイを持つコンピュータも設置され、学生が利用できるようになっていた。また、本館と同じように、24時間開館していることもあり、キッチンコーナーが設置されていた。



写真8 クイーンズランド大学生物科学図書館

このように、図書館本館や生物科学図書館などで、多くの学修スペースを実現出来ている背景には、後述するガトンキャンパスに大きな雑

誌や書籍のデポジットスペースであるウェアハウス（保存書庫）が設置されており、多くの雑誌や書籍が保管され、複写の依頼などに対応できていることが大きいようだ⁸⁾。

3. クイーンズランド大学農学部図書館

10月3日の朝7時15分に大学本部のあるセントルシアキャンパスからガトンキャンパス行きのインターキャンパスバス（学生・教職員用に大学が用意したバス）のバス駐車場で、教員サービス図書館チームの課長であるレイチェル・ハリソン女史と待ち合わせた。7時30分発のインターキャンパスバスで、レイチェル・ハリソン女史に同行して、ガトンキャンパスを目指した。

レイチェル・ハリソン女史は、週に1-2日はガトンキャンパスの農学部図書館の支援で訪問しているとのことであった。農学部図書館の常勤者では対応が難しい、専門的な要望に応えるために本部の図書館員が訪問しているとのことであった。

大学本部のあるセントルシアキャンパスのインターキャンパスのバス停から乗車し、ブリスベン市内の途中で何力所か停車し、ガトンキャンパスに向かう学生や教職員をピックアップしながら、ガトンキャンパスには2時間程度で到着した（写真9）。

当日のバスでは、レイチェル・ハリソン女史の他に、研究支援担当の図書館員とも一緒になった。彼は週一回程度、ガトンキャンパスの農学部図書館に支援に来ているとのことであった。



写真9 クイーンズランド大学
ガトンキャンパス

農学部があるガトンキャンパスはブリスベン市の中心部から80キロメートル以上内陸に離

れており、平原が広がる農業地帯の一角にある。ガトンキャンパスには農業科学と獣医学の学部や大学院と広い農場や牧場が併設されている（写真9）。構内には毒を持つヘビも生息しているようでヘビに注意の看板も掛けられている。

最初に、図書館事務室の会議室で、ガトンキャンパスの図書館について概要説明を受け、その後、図書館内を案内して貰った。2階建ての建物で、内部はゆったり作られている。24時間利用可能としていることもあり、多くのスペースを学生がゆっくり学修出来るように配慮してテーブル等が配置されていた。

図書館の入口を入ると、広い空間になっており、学生がグループで相談出来るスペースや一人で静かに学修できるスペースが配置されていた。



写真10 クイーンズランド大学農学部図書館
レファレンス・IT支援コーナー

図書館員は交代で「AskUs」と表示されたレファレンス・IT支援デスクで、学生の様々な質問に対応していた（写真10）。私の訪問時には、若い女性の図書館員がデスクで勤務しており、今は臨時の図書館員であるが、図書館学の大学院を卒業して、ぜひ、正規の図書館員を目指したいと話されていた。

館内には、学生が気分転換やリラックスできる広いスペースが設置されていた（写真11）。

さらに、長時間滞在する学生が多いためもあり、食事（ホットフード）がとれるキッチンコーナーが設置されている。

古い雑誌や書籍などはガトンキャンパス内にある全学の保存書庫に移動されており、このような学生の学修のための広い空間が生み出され

たようである。



写真 11 クイーンズランド大学農学部図書館
リラックススペース

農学部図書館ということもあり、学生が学生実習などで作成した植物標本がコレクションされており、学生がすぐ手に取れるように配架されていた(写真 12)。



写真 12 クイーンズランド大学農学部図書館
植物標本コレクション

4. クイーンズランド大学保存書庫

教員サービス図書館チーム課長レイチェル・ハリソン女史に、ガトンキャンパス訪問時のアレンジをして頂いたのであるが、事前のやり取りのなかで、保存書庫 (Library Warehouse) の見学を勧められ、訪問することになった(写真 13)。

ガトンキャンパスへの保存書庫の設置は、雑誌や専門書のデジタル化の進行の中で大学図書館として、学生や教職員への新たなサポートの形態を検討する中で生まれたとのことであった。

現在、ガトンキャンパスの保存書庫は、数名

の図書館スタッフにより運用されており、大学全体からの雑誌や書籍の受け入れと保管を行い、オンラインで複写の依頼を受けて、依頼された文献などを電子化して、依頼者にメール等で送付する作業を行っている。

保存書庫の屋上には、ソーラーパネルが設置されている。キャンパス内にもソーラーパネルが設置されており、保存書庫で必要な空調やその他電力の多くを自然エネルギーでまかなっているとのことであった⁸⁾。

収蔵資料は雑誌と単行本が多いが、その他に、抄録誌、マイクロフィルム、地図、楽譜、学位論文やビデオなどのマルチメディア資料も保存しており、保存書庫内を詳しく見学させて頂いた(写真 14)。ここでは、紙数の制約もあり、すべての写真を掲載出来ないのが残念である。



写真 13 クイーンズランド大学保存書庫全景



写真 14 クイーンズランド大学保存書庫内部

5. まとめ

著者は本誌で多くの海外の図書館を紹介してきたが、海外の農学部図書館について紹介できる機会はほとんど無かった。

今回の訪問は、本文中ですでに紹介したクイーンズランド大学図書館のタンヤ・ジーベル女史やレイチェル・ハリソン女史のご厚意があって実現したもので、大変感謝したい。

クイーンズランド大学図書館ではガトンキャンパスに大規模な保存書庫を設置しており（写真 13）、そちらに過去の大切な雑誌や書籍あるいは CD や DVD などのマルチメディア資料を移管し、そこから過去の資料の複写サービスを実施している。このことで、ブリスベン市内にある大学の中心キャンパスとしてのセントルシアキャンパスに、新たに学生の学修のための大規模な施設を作ることなしに、図書館本館や生物科学図書館内に学生のための大規模な学修スペースを実現していることに強い印象を受けた。同時期に訪問したオーストラリアのシドニー工科大学図書館などでも同様な試みがなされていた。

レファレンスデスクは学生が質問しやすいようにオープンな形に工夫のうえで配置されていた（写真 6）。また、「レファレンス・IT 支援」と明記することで、図書館が図書などのレファレンスに対応するだけでなく、図書館が学生に対してネットワークやパソコンの利用に当たっての情報技術に関する支援をしてくれるところであることを強く印象付け、学生が気軽に情報技術のサポートを受けられることを図書館として強くアピールしていたことが印象的であった。

図書館として、専任の職員を配置して、研究支援・コンサルティングに力を入れ（写真 7）、学生や研究者が多く通行する場所に研究支援のためのブースを設置し、気軽に立ち寄れるようにしていることが参考になるのではと感じた。

さらに、ブリスベン市中のメインキャンパスのみでなく、農学部があるガトンキャンパス図書館でも、同様の研究支援・コンサルティングサービスが実現していることである。前述したように、専任の図書館員が週 1 回、ガトンキャンパスの農学部図書館に滞在することで対応

しようとしていることに目を見張った。

オーストラリアのクイーンズランド大学農学部図書館を中心にコロナ禍後の大学図書館の取り組みについて紹介してきたが、コロナ禍を経て、ネットワークや生成 AI などの情報技術のさらなる進展に対応して、図書館として学生や教職員に提供するサービスの内容に工夫を加えて、努力している様子を知ることができ、収穫の多い訪問であった。

謝辞

今回のクイーンズランド大学図書館およびガトンキャンパスの農学部図書館への訪問は、クイーンズランド大学図書館タンヤ・ジーベル女史やレイチェル・ハリソン女史のご厚意があって実現したもので、大変感謝したい。

参考文献

- 1) 国際図書館連盟情報未来サミット 2024 (IFLA Information Futures Summit 2024 in Brisbane) <https://2024.ifla.org/>
- 2) クイーンズランド大学図書館 (The University of Queensland Library) <https://www.library.uq.edu.au/>
- 3) クイーンズランド州立図書館 (State Library of Queensland) <https://www.slq.qld.gov.au/>
- 4) 長塚隆「ブリスベンで開催された「IFLA 情報未来サミット」」『図書館雑誌』118 巻 12 号 714-717 ページ (2024 年 12 月号)
- 5) クイーンズランド大学 (The University of Queensland) <https://www.uq.edu.au/>
- 6) QS World University Rankings: Top global universities <https://www.topuniversities.com/qs-world-university-rankings>
- 7) UQ fast facts <https://about-us.uq.edu.au/fast-facts>
- 8) クイーンズランド大学図書館保存書庫 (The University of Queensland Gatton Library Warehouse) <https://solar-energy.uq.edu.au/facilities/gatton/library-warehouse-building-8248>
- 9) クイーンズランド大学ガトンキャンパスでの学修プログラムとコース (The University of Queensland Gatton Campus Study) <https://gatton.uq.edu.au/study/programs-courses>

事務局報告

2024年度第4回編集委員会

日 時：2025年2月18日（火） 15：00～

場 所：Zoomによるオンライン会議

出席者：下田尊久委員長、棚橋佳子委員、長塚隆委員、余川浩太郎委員、尾崎聖太郎事務局長、上田広子事務局員

欠席者：なし

議 題： 1．218号（2025年6月1日発行予定）の
原稿依頼の状況確認
2．219号（2025年9月1日発行予定）以降の原稿依頼について
3．会誌の電子ジャーナル（PDF版）への移行について
4．その他

2025年度第1回理事会（メール審議）議事録

審議期間：2025年4月15日（火）～4月18日（金）
午後3時

承認日：2025年4月18日（金）

議 題： 1．新任理事の選任

以下の新任理事候補の選任について、定款第14条第1項に基づき審議した結果、異議なく承認された。

・高野 正嗣（たかの まさつぐ）
国立研究開発法人水産研究・教育機構 本部研究戦略部 研究情報課長
（図書資料館長事務取扱）

なお、任期は、本議事録承認日から2027年度通常総会時までとする。

日本農学図書館協議会誌 F 版 機関利用 利用規定

日本農学図書館協議会誌 F 版 機関利用 利用規定は（以下「本規定」という）は、特定非営利活動法人（NPO法人）日本農学図書館協議会（以下「農図協」という）が提供する日本農学図書館協議会誌 F 版（以下「農図協会誌 F 版」という）の団体会員および団体会員 の機関での利用に関わる全ての事項に適用されます。

第 1 条（内容）

農図協会誌 F 版とは、農図協が発行する農図協会誌を F 形式で提供するサービスです。

第 2 条（本規定の範囲および変更）

本規定は、農図協会誌 F 版をご利用いただく際の、農図協と契約者（団体会員 および団体会員 ）との一切の關係に適用します。契約者とは、本規定の内容を承諾の上、農図協が定める手続きに従い農図協に加入し、農図協会誌 F 版の利用を承認して登録の手続きを完了した方をいいます。農図協は、契約者の承諾を得ることなく、農図協が適当と判断する方法で契約者に通知することにより、本規定を変更できるものとします。

第 3 条（利用条件）

農図協会誌 F 版は、農図協に加入し、農図協の請求に基づき会費を支払い、農図協がその支払いを確認することにより利用可能となるものとします。

第 4 条（契約期間）

契約期間は 4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までの 1 年単位とします。なお、年度途中から利用を開始する場合は、初年度のみ、サービス開始希望月から 3 月 31 日までとします。

第 5 条（ F 版の提供範囲）

農図協会誌 F 版の提供範囲は、同一機関内とします。

第 6 条（ F 版の提供形式）

農図協会誌 F 版は、年間で 4 回発行され、発行時に契約者の登録された電子メールに、閲覧のためのパスワードと共に、 F 形式で送信されます。契約者は F 形式の農図協会誌 F 版を同一機関の構成員（大学の場合には学部学生も含む）に供することが出来ます。その際に、1 部に限り紙面に複製し、図書館内に閲覧のために配置することが出来ます。

第7条（利用の承認と取消） 農図協は、利用を申し込んだ機関が以下の項目に該当する場合、利用を承認しないことがあります。また、承認後であっても、承認を取り消すことがあります。 1. 過去に本規定に違反するなどにより、解約が行われていることが判明した場合。 2. 利用申し込み内容に虚偽、重大な誤記または記入もれがあることが判明した場合。 3. 利用料金の支払いを怠っていることが判明した場合。 4. その他、農図協が契約者の行為を不適当と判断した場合。

第8条（禁止事項）

契約者は、農図協会誌 F 版の利用にあたって、以下の行為を行ってはならないものとします。

1. 農図協または第三者の著作権、その他の権利を侵害する行為、または侵害するおそれのある行為。
2. 農図協または第三者に不利益もしくは損害を与える行為、またはそれらのおそれのある行為。
3. 農図協が契約者に発行した ID およびパスワードを第三者に使用させたり、貸与、譲渡、名義変更、売買等すること。
4. 農図協の承認なく、代行検索を目的として農図協会誌 F 版を利用するなど、日本農学図書館協議会誌 F 版を通じた、もしくは関連した営利を目的とする行為、またはその準備を目的とする行為。
5. その他、法令に違反する行為。

第9条（著作権等）

農図協会誌 F 版で提供されるデータの著作権法上の権利は、農図協に帰属します。

第10条（サービス内容の変更、追加および廃止）

1. 農図協会誌 F 版の内容は、農図協がその時点で提供可能なものとします。
2. 農図協は、契約者に事前の通知をすることなく、農図協会誌 F 版の内容の一部または全部を変更、追加および廃止することができるものとします。ただし、農図協会誌 F 版を廃止する場合には、農図協が適当と判断する方法で、事前に契約者にその旨を通知します。

第11条（サービスの中断）

1. 農図協は、天災、事変、予測できない回線上の障害、その他の不可抗力、また、農図協会誌 F 版のシステムの保守、点検を定期的、または緊急に行う場合、一定期間、農図協会誌 F 版のサービスを停止することができるものとします。

・農図協は、前項の規定により農図協会誌 F 版の運用を中断する場合は、農図協が適当と判断する方法で、事前に契約者にその旨を通知します。ただし、緊急の場合には、この限りではありません。

3. 農図協は、サービスの停止により契約者が被った一切の被害について、いかなる責任も負わないものとします。また、契約者からの利用料金等の返還請求にも応じないものとします。

第 1 条（損害賠償）

契約者が本規定に違反する行為、または不正もしくは違法な行為によって農図協に損害を与えた場合には、農図協は当該契約者に対して、農図協が被った損害の請求をできるものとします。

第 13 条（免責事項）

1. 農図協は、農図協会誌 F 版の内容、および契約者が農図協会誌 F 版を通じて得る情報等について、いかなる保証も行いません。

・農図協は、契約者が農図協会誌 F 版により得たデータ、またはその他、農図協会誌 F 版に関連して被ったいかなる損害について、一切責任を負いません。

3. 農図協は、契約者が農図協会誌 F 版の利用に関連して使用するシステム、機器およびソフトウェアについて、一切動作保証を行いません。

第 14 条（解約）

1. 契約者が契約期間の途中で契約を解約する場合は、契約者がその旨を書面にて農図協に申し出るものとします。なお、解約する契約者が既に払い込んだ年間利用料金等は、一切払い戻しいたしません。

・契約者が本規定に定める事項に違反した場合、農図協は事前に契約者に通告した上で、利用契約を解除できるものとします。ただし、本規定第 8 条および第 1 条に違反する行為が判明した場合は、事前に通告することなく、ただちに利用契約を解除できるものとします。

第 15 条（解約後の契約者の義務）

契約者が解約した場合においても、すでに契約者に生じた金銭債務および第 7 条、第 8 条に定める義務は消滅しないものとします。

第 1 条（準拠法）

本規定の成立、効力、履行および解釈に関しては、日本法が適用されるものとします。

第 17 条（その他）

利用申込内容に変更のある場合は、速やかに農図協までご連絡下さい。

本規定に定めのない事項については、契約者、農図協の二者間にて協議して定めるものとします。

以上

付則

05年3月 日制定

NPO法人日本農学図書館協議会では、当面する図書館の課題や日常の図書館員の声など、自由に
ご投稿していただくことを願っております。ご不明な点は事務局までお問い合わせください。

【問い合わせ先】 E-mail : jaald@nifty.com

日本農学図書館協議会誌 投稿要領

2020年5月1日改定

1 趣旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の投稿に
関する取り扱いについて定めるものとする。

2 投稿者の資格

本誌に投稿できる者は、農学系図書館の活動に
賛同する者とする。

3 執筆及び投稿要領

原稿執筆に当たっては、本要領及び別に定める
原稿執筆要領に従うものとする。

4 投稿原稿の取り扱い

- (1) 投稿原稿は会誌編集委員会においてその採否
を決定する。
- (2) 投稿された原稿は、原則として返却しない。

5 謝礼

- (1) 執筆者には、原稿が掲載された「日本農学図
書館協議会誌」を3部贈呈する。
- (2) 投稿及び依頼原稿の稿料は別に定める。

6 著作権

- (1) 本誌に掲載する著作物の著作権は、日本農学
図書館協議会に帰属する。
- (2) 執筆者自身が当該著作物の再利用を希望する
場合、日本農学図書館協議会は、再利用が学術
研究及び農学図書館業務改善の進展に資するも
のである場合は、これを認めることがある。
- (3) 第三者から、論文の複製及び転載などに関す
る許諾の要請があり、日本農学図書館協議会が
必要と認めた場合は、許諾することがある。

7 個人情報

編集の過程において入手した個人情報は、本誌
の編集刊行に関する活動以外の目的には使用しな
い。

8 その他

- (1) ホームページに発行した会誌の目次及び本文
を逐次掲載する。会員は、発行されたパスワード
により会誌本文を直接閲覧することができる。
- (2) 冊子会誌に掲載する図表、写真はモノクロと
するが、ホームページにはカラーで掲載する。

日本農学図書館協議会誌 原稿執筆要領

2023年11月13日改定

1 趣旨

この要領は、日本農学図書館協議会誌の原稿執
筆に関する事項を定めるものとする。

2 投稿原稿は、次の要領で作成し提出する。

- (1) 原稿の受付は、随時とする。
- (2) 原稿は、Word形式もしくはテキスト形式を
使用し、横書きで10,000字程度（図表・写真は
1枚当たり250文字換算）とする。また、図表
も原則として、電子化したデータで提出するも
のとする。刷り上りは4ページ程度を想定する。
- (3) 文中の見出し番号の表記は、1. 1) ①とする。
- (4) 図表の見出しは、図1及び表1とし、図の下
および表の上に記したうえで、挿入箇所を本文
欄外に指示する。
- (5) 注記もしくは引用文献等は、本文の該当箇所
右肩に1)と記し、原稿の末尾にまとめて記載す
る。なお、記載例は①～③の通りとする。
① 編著者名『書名』（シリーズ名）出版社、出
版年（西暦）、引用ページ
② 執筆者名「論文名」『雑誌名』巻号、発行年月、
引用ページ
③ 項番は、1), 2), 3)・・・とし、半角片括弧に
統一する。
- (6) 原稿には、表題及び英文タイトル、執筆者氏
名、所属機関、住所及びローマ字名、所属機関、
住所の英文名を添付する。
- (7) 原稿の提出は下記宛てとし、日本農学図書館
協議会事務局が受領した日をもって原稿受付日
とする。
〒156-8502 東京都世田谷区桜ヶ丘1-1-1
東京農業大学 教職・学術情報課程内
NPO法人 日本農学図書館協議会事務局
jaald@nifty.com
- (8) 執筆者の校正は、再校までとする。
- (9) 「別刷」を希望する者は、校正の際に必要な部数
を日本農学図書館協議会事務局に連絡すること。
なお、経費（実費）については、本人負担とする。

(編 集 委 員)

委員長	下田 尊久	個人会員
委 員	棚橋 佳子	東京農業大学学術情報課程
	長塚 隆	鶴見大学名誉教授
事務局	尾崎 聖太郎	日本農学図書館協議会

会 員 頒 布

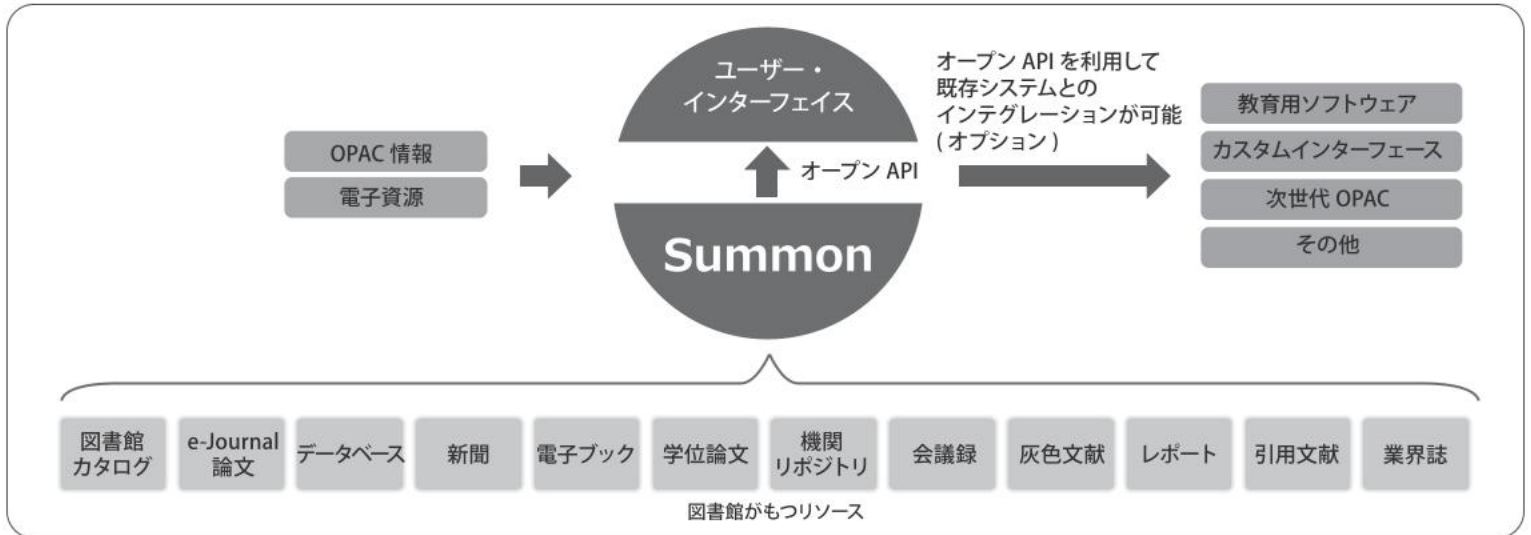
日本農学図書館協議会誌 218号
2025年6月1日発行
発行人 長塚 隆
編集・発行 特定非営利活動法人日本農学図書館協議会
住 所 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学教職・学術情報課程
TEL&FAX : 03(3408)5077
e-mail : jaald@nifty.com
URL : <http://jaald.life.coocan.jp>
D T P (株)サン・プレーン
住 所 〒114-0014 東京都北区田端 6-1-1
田端ASUKAタワー17F

I S S N 2759-6877 (O N L I N E)
I S S N 1342-1905 (P R I N T)



図書館が提供する様々な種類の学術資料を 一つの検索窓からまとめて検索することができます

Summon は Ex Libris 社のウェブスケールディスカバリーサービスです。
 グーグルのようなシンプルなインターフェイスから図書館独自の広範囲で信頼性の高い情報へすばやくアクセスすることができます。



POINT 1

すべてのリソースを一度に検索

すべてのリソースをたったひとつの検索窓から見つけることができます。現在のインターネットユーザーのニーズを満たす新しい学術情報の検索スタイルを提供します。

POINT 2

信頼のおけるコンテンツだけを検索

検索対象はすべて図書館のコンテンツです。信頼性が高く、しかも入手可能なコンテンツにのみアクセスすることができます。

POINT 3

瞬時に検索結果を表示

図書館で利用できるすべてのリソースのメタデータをあらかじめハーベスティングさせるので、Google などの検索スピードを実現します。



図書館システムと連携して 所蔵・貸出情報を リアルタイムで表示

冊子の検索結果には現在の貸出し状況や保管場所が表示されます。検索結果をクリックすると図書館 OPAC のライブリンクになっています。

availability: 貸出中, 中央図書館所蔵

SaaS 型サービスなので 導入・メンテナンスの 手間がかかりません

Software as a Service(SaaS) で提供されるため、サーバーの設置やアップデート、メンテナンスといった作業に人員を割く必要はありません。常に最新で最適な状態でサービスを利用することができます。

目的の資料への確にナビゲートします

ファセット機能によりフォーマット、主題、出版年などによる絞り込み検索を効率的に実行できます。また、360Link などのリンクリゾルバと連携して該当の資料に確実にたどり着くことができます。

360 Link

お見積もりやトライアルのご相談は...